The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	唐代河北藩鎮に対する公主降嫁とウイグル
Author(s)	新見, まどか
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2013, 47, p. 25-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

唐代河北藩鎮に対する公主降嫁とウイグル

新見まどか

キーワード：河北藩鎮／公主降嫁／ウイグル／盧龍節度使

はじめに

安史の乱（七五五～七六三）直後、河北・河南に安置された反乱軍の武将や軍団は、藩鎮となって軍事力・経済力を蓄え、半独立勢力を築くまでに成長した。中でも強い反唐朝的傾向を持ったのが、所謂「河朔三鎮」（魏博・成徳・盧龍節度使）に代表される河北藩鎮である。そのため、朝廷が河北藩鎮に講じた軍事・行政・財政等の諸政策は、唐後半期の政治情勢を明らかにする上で欠かすことのできない研究課題であり、既に多くの先行研究が蓄積されている。だがしかし、河北藩鎮に対する婚姻政策、即ち公主降嫁は、これまで殆ど注目されてこなかった。

河北藩鎮への公主降嫁は、皇帝と節度使とを直接血縁によって結びつける点で、他とは一線を画す特徴的な施策であり、その政治的背景は決して看過できない。(1) さらに、河北藩鎮と皇帝との婚姻関係の解明は、筆者がこれまで行っ

てきた、代宗期から憲宗期（七六二～八二〇）における藩鎮同士の婚姻の分析［新見二〇一二／新見二〇一三］に、より立体的な視座を与えることにも繋がる。しかも安史の乱後、北方の草原世界にはウイグルが台頭していた。ウイグルは唐代を通して、皇帝の実の娘（真公主）を降嫁された唯一の外国勢力であるが、河北藩鎮への公主降嫁を分析してゆくと、その背景にはウイグルの存在が大きく影響していたことが明らかになってくるのである。

ただし、公主降嫁の相手は、河北藩鎮やウイグルに限らず多岐に亘る。そこで本稿では、まず第一章で代宗～憲宗期[2]について、史料上確認できる降嫁の全事例を抽出し、具体的な婚姻関係を把握する。次に第二章で、降嫁の形態や時期をウイグルと比較しながら、公主降嫁全体の中での河北藩鎮の位置づけを考察する。それを踏まえて第三章で、河北藩鎮の中でも公主降嫁が行われたものと行われなかったものとが存在した理由を明らかにしたい。そのことによって本稿は、河北地域と北方草原世界との繋がりを描き出すものである。

第一章　唐朝による公主降嫁と河北藩鎮

（1）代宗～憲宗期における公主降嫁

高祖から高宗期、唐朝は主に創業の功臣や北周・隋朝大官の子弟を駙馬（公主の夫）に選んできた。ところが武則天の出現を機に、こうした創業以来の支配集団は崩れ去ってしまう［布目一九六八］。さらに安史の乱という大混乱を経ると、唐朝は従来に代わる新たな支持基盤構築の必要に迫られた［陳寒一九九八、九六頁］。そのため公主降嫁相手は、乱鎮圧に寄与した功臣、科挙合格者、そして藩鎮勢力へと変化してゆく［築山一九八三］。

では、安史の乱後の駙馬は、具体的にどのような人物だったのだろうか。ここでは、乱終息後の代宗（在位：

七六二～七七九）から、憲宗（在位：八〇五～八二〇）までの真公主について、降嫁先が分かる者の一覧〔表1〕を次頁に掲げる。作成にあたっては『新唐書』巻八三、諸帝公主列伝及び『唐会要』巻六、公主条の記事を基本に、駙馬やその一族の列伝、『資治通鑑』、石刻史料なども参照した。

〔表1〕に示したように、代宗～憲宗期、真公主の降嫁相手が判明するのは全三六例である。中には降嫁が一度きりに留まり、駙馬の名前や官職以外の情報が殆ど判明しない事例も多い。しかし一方で、親子、或いは兄弟など、同じ一族が二人以上の公主降嫁を受けたことが確認できる事例も半数近く存在する。その事例には、本稿で考察対象とする河北藩鎮も含まれる。このような複数回に亘る公主降嫁は、史料的に詳細な考察が可能なばかりでなく、駙馬一族との持続的な結びつき維持という朝廷の意思が垣間見られ、長期的な政策との関わりという意味では一度限りの降嫁に比べ重要性が高い。そこで、以下では考察対象を複数回の公主降嫁を受けた一族に絞り、具体的な皇帝との婚姻関係を確認していく。

（2）公主降嫁形態の分析

婚姻関係の分析にあたって本稿で重視したいのは、公主だけでなく駙馬側からの女子の移動である。公主降嫁を受けた一族の中には、反対に自身の娘を皇帝の后妃とし、産まれた息子が帝位に就くと外戚として権勢を奮った者がいる。一方よく知られているように、ウイグルなど外国勢力の場合、皇帝が相手国の王女を后妃として娶った事例は無い。そのため、駙馬側が皇帝の后妃を出したか否かは、朝廷と駙馬一族との関係を解明する上で重要な問題点となる。以下、人名の後のNo.は〔表1〕と対応。

〔表1〕代宗～憲宗の公主降嫁先

皇帝	No.	公主	駙馬	駙馬の官職・地位	降嫁年	駙馬の父	備考	出典
代宗	1	永清公主	裴儆	｜	｜	｜	｜	新八三、会要六
	2	昭懿公主	郭曖	郭子儀の子	大暦中	郭子儀	娘が憲宗の皇后に	旧一二〇、新八三、一三七、会要六
	3	嘉豊公主	高怡	｜	｜	｜	｜	新八三、会要六
	4	長林公主	沈明	衛尉少卿	｜	｜	｜	新八三、会要六
	5	嘉誠公主	田緒	魏博節度使	七八五	田承嗣	｜	旧一四一、新八三、会要六
	6	普寧公主	呉士広	｜	｜	｜	｜	新八三、会要六
	7	晋陽公主	裴液	太常少卿	｜	裴徽	駙馬の妹は順宗の妃に	旧五一、新八三、会要六
	8	義清公主	柳杲	秘書少監	｜	柳潭	駙馬の兄はNo.16の柳昱	旧五一、新八三、会要六、「柳昱墓誌」（補遺三）
	9	寿昌公主	竇克良	光禄少卿	｜	竇沔	唐朝創業以来の外戚	旧一八三、新八三、会要六
	10	新都公主	田華	魏博節度使田緒の兄	七九六	田承嗣	代宗期、永楽公主を尚る	旧一四一、新八三、会要六
徳宗	11	貞穆公主	韋宥	秘書少監	｜	｜	公主は皇后の娘	新八三、会要六
	12	義陽公主	王士平	成徳節度使の子	七八六	王武俊	｜	旧一四二、新八三、会要六
	13	義章公主	張茂宗	義武節度使の子	七八七	張孝忠	実際の降嫁は七九七年	旧一四一、新八三、会要六
	14	臨真公主	薛釗	秘書少監	｜	｜	｜	新八三、会要六
	15	永陽公主	崔諲	殿中少監	｜	｜	｜	新八三、会要六
	16	咸安公主	天親可汗	ウイグル可汗	七八八	｜	和蕃公主	旧一三九、新八三、二一七、会要六
	17	宜都公主	柳昱	殿中少監	七九八	柳潭	駙馬の弟はNo.7の柳杲	旧五一、新八三、会要六、「柳昱墓誌」（補遺三）
順宗	18	漢陽公主	郭鏦	郭曖の子	順宗期	郭曖	公主は皇后の娘	旧一二〇、新八三、会要六

	19	恭靖公主	鄭何	—	—	—	公主は皇后の娘	新八三、会要六
	20	東陽公主	崔杞	—	—	—	—	新八三、会要六
	21	西河公主	沈翬	—	—	—	—	新八三、会要六
	22	雲安公主	劉士涇	—	徳宗期	劉昌	公主は皇后の娘	旧一五二、新八三、会要六
	23	襄陽公主	張克礼	義武節度使の子	八〇四	張茂昭	—	旧一四一、新八三、会要六
	24	虢国公主	王承系	成徳節度使の子	八〇九以前	王士真	—	旧一六〇、新八三、会要六
憲宗	25	恵康公主	于季友	襄陽節度使の子	八〇六	于頔	—	旧一五六、新八三、一七二、通鑑二三七、会要六
	26	宣城公主	沈𧫒	—	—	—	—	新八三、会要六
	27	温儀公主	韋讓	—	—	—	—	新八三、会要六
	28	荘淑公主	杜悰	殿中少監	八一四	杜式方	公主は皇后の娘	旧一四七、新八三、一一八、会要六
	29	陳留公主	裴損	—	—	—	—	新八三、会要六
	30	南康公主	沈汾	—	—	—	—	新八三、会要六
	31	臨真公主	衛洙	宰相の子	憲宗期	衛次公	—	旧一五七、新八三、会要六
	32	真源公主	杜中立	光禄少卿	文宗期	杜羔	—	旧一四六、新八三、一七二、会要六
	33	永順公主	劉弘景	—	—	—	—	新八三、会要六
	34	安平公主	劉異	—	—	—	—	新八三、会要六
	35	永安公主	保義可汗	ウイグル可汗	—	—	和蕃公主（未遂）	新八三、会要六
	36	太和公主	崇徳可汗	ウイグル可汗	八二一	—	和蕃公主	旧一九五、新八三、二一七下、会要六

※略号…旧＝旧唐書／新＝新唐書／会要＝唐会要／通鑑＝資治通鑑／補遺＝全唐文補遺。「—」＝不明。
※公主の並び順は『新唐書』諸帝公主に拠る。グレースケールの№は複数回公主降嫁を受けた一族の者。

①**郭曖**（**No.2**）・**郭鏦**（**No.18**）：郭曖は、安史の乱鎮圧に寄与した郭子儀の息子。郭鏦は、郭曖と昭懿公主との息子。郭子儀の子孫は安史の乱後、帝室と密接な姻戚関係を築いた［築山一九八三、七頁／王寿南一九八八、一一五頁］。中でも郭曖については、『新唐書』巻七七、憲宗懿安皇后郭氏伝（中華書局標点本、三五〇四頁）に「憲宗の懿安皇后郭氏は、汾陽王子儀の孫なり。父は曖、昇平公主（＝昭懿公主）を尚り、實しく后を生む。憲宗、廣陵王と爲るや、娣して以て妃と爲す。…（中略）…是れ穆宗を生む」とあるように、昭懿公主との間に産まれた娘（同時に郭鏦の同母姉妹）が憲宗の皇后、及び穆宗の生母だった点が注目される。つまり郭子儀の子孫は、公主降嫁を受けるだけでなく、その降嫁された公主が産んだ娘を反対に皇帝の妃にする、双方向的な婚姻関係を結んでいたのである。

②**田緒**（**No.5**）・**田華**（**No.10**）：田緒（在任：七八四～七九六）は魏博節度使、田華は田緒の兄。魏博節度使（会府：魏州）は、安史軍の降将田承嗣が任じられて以来、河北に半独立勢力を築いており、藩帥位も田氏一族によって継承されてきた。つまりこの婚姻は、朝廷と魏博節度使との政略結婚である。なお、田華は代宗期に永楽公主なる人物を娶っていたが、[3] 彼女の父は判然としない。或いは仮公主の可能性も考えられる。ただし、前掲の郭氏と異なり、魏博節度使から一族の女子が皇帝の后妃となった形跡が見当たらない点には留意したい。

③**裴液**（**No.7**）：裴液は、裴徽の息子。裴徽は、『旧唐書』巻五一、楊貴妃伝（中華書局標点本、二一八一頁）に「虢国（虢国夫人）の男裴徽は肅宗の女延光公主を尚り、女は讓帝の男に嫁す」と記されており、玄宗の寵姫楊貴妃の姉、虢国夫人を母に持ち、肅宗の延光公主と結婚したことが確認できる。楊氏一族及び楊氏の姻族へは、玄宗の時から多数の公主降嫁が行われた［王寿南一九八八、一〇九－一一〇頁］。裴徽父子への公主降嫁は、裴氏の姻族楊氏が楊貴妃という皇帝の妃を出したことに対応していたのである。さらに、帝室との血縁関係を補強するかのように、裴徽の娘は讓帝（玄宗の兄）の息子に嫁いでいる。

④柳杲（No.8）・柳昱（No.17）：柳杲と柳昱については、柳昱の墓誌「大唐故銀青光禄大夫殿中少監駙馬都尉贈工部尚書河東柳府君（昱）墓誌銘并序」（『隋唐五代墓誌匯編』陝西第二冊、二一頁／『全唐文補遺』第三輯、一三八―一三九頁）によって、両者が兄弟であること、及び父柳潭も粛宗の娘和政公主の駙馬だったことが判明する。

父潭は、皇朝の太僕卿・駙馬都尉にして、尚書左僕射を贈らる。外祖は粛宗皇帝、祖妣は章敬皇后、妣は和政公主なり。庚子の歳夏四月、公は常楽里の第に生まる。天倫は其れ四なり。…（中略）…叔曰わく杲、皇朝の秘書少監・駙馬都尉にして、義清公主を尚る。公は其の季なり。試殿中丞に尋り、緋魚袋を賜わる。貞元六年冬、舒王府司馬を拝す。十二年冬、銀青光禄大夫・行殿中少監・駙馬都尉を授けらる。十四年夏六月、今の皇帝の四女宜都公主を尚る。

さらに柳潭の兄柳澄は、楊貴妃の姉秦国夫人楊氏の婿であった。即ち『旧唐書』巻五一、楊貴妃伝（二一八一頁）には、「秦国夫人の婿柳澄は先に死するも、男の鈞は長清公主を尚り、澄の弟の潭は粛宗の女和政公主を尚る」と記されている。よって柳氏も先の裴氏と同様、楊氏との姻戚関係ゆえに降嫁が行われたと見てよい。

⑤竇克良（No.9）：竇氏の先祖は匈奴系の費也頭である［石見一九八二、五三―五四頁］。彼らは北周・隋の帝室とも姻戚関係を築き、唐代には高祖李淵の皇后を出して以降、外戚として有力な地位を占めた。〔表1〕に見えるのは竇克良のみだが、唐代を通じて八人が公主を娶り、六人の后妃を入嫁させている。八世紀以降では、睿宗の皇后（玄宗の母）や粛宗の皇后が竇氏出身だった［布目一九六七、三一九―三二〇頁／王寿南一九八八、一一一頁］。つまり竇氏は公主を降嫁されるだけでなく、逆に皇帝に対して一族の娘を娶せる、双方向的な婚姻関係を結んでいたのである。

⑥王士平（No.12）・王承系（No.24）：王士平は、成徳節度使王武俊（在任：七八二～八〇一）の息子、王士真（在任：八〇一～八〇九）の弟。王承系は王士真の息子、王承宗（在任：八〇九～八二〇）の弟。成徳節度使（会府：恒州）は、先の魏博節度使と同様、旧安史軍の武将が安置されて成立し、徳宗期以降は王武俊・王士真・王承宗の順に藩帥位が世襲されている。ただし成徳節度使側から王氏一族の女子が皇帝に嫁いだ事例は見出し得ない。この点は、先に言及した魏博節度使と共通する。

⑦張茂宗（No.13）・張克礼（No.23）：張茂宗は、義武節度使張孝忠（在任：七八二～七九一）の息子、張茂昭（在任：七九一～八一〇）の弟。張克礼は張茂昭の息子。義武節度使（会府：定州）は建中三年（七八二）、成徳節度使領の一部を分割する形で成立し、張孝忠の後は彼の息子張茂昭に藩帥位が世襲された。そのため義武節度使には、藩帥の息子、そして弟に公主降嫁がなされたことになる。また、義武節度使側が皇帝に娘を嫁がせていない点は、魏博・成徳両節度使と同様である。

⑧天親可汗（No.16）・保義可汗（No.35）・崇徳可汗（No.36）：彼らは北方草原世界の覇者、ウイグルの可汗である。一連の公主降嫁は、唐朝廷にとって懐柔策の一環であり［藤野二〇〇八、五三頁］、また対吐蕃防衛の上でも重要な政策だった［Mackerras, 1972, pp. 46-47／Pan, 1997, pp. 120-121］。その反面ウイグルは、婚姻に伴う絹馬交易に重きを置いていた［日野一九七八、二六八―二六九頁／林一九九二、一一九頁］。さらに特筆すべきは、ウイグルが唐代を通じて唯一、真公主を降嫁された外国勢力だった点である。ところが逆に、ウイグル王女は終に皇帝の后妃となることがなかった。[4] この点で双方の婚姻は、唐皇帝の公主のみが相手側に嫁ぐ形態だったといえる。

以上により、代宗から憲宗期における複数回の公主降嫁を受けた一族の皇帝との婚姻関係の具体像が判明した。次章ではこれを踏まえて、河北藩鎮への公主降嫁の特徴を検討していく。

第二章　河北藩鎮への公主降嫁の特徴

（1）公主降嫁形態からみた河北藩鎮とウイグル

〔地図〕徳宗期の河北・河南藩鎮

譚其驤（主編）『中国歴史地図集 第五冊 隋・唐・五代十国時期』（地図出版社、1982）を元に作成。地名・藩鎮名は本発表に登場するもののみ記載。◆は各藩鎮の会府。**ゴシック**は唐朝から公主降嫁を受けた藩鎮。

本章では、河北藩鎮への公主降嫁が全体の中に占めた位置づけを明らかにする。この時まず参考になるのが、第一章第二節で検討した、駙馬側が皇帝の后妃を出したか否かである。公主降嫁を受けただけでなく反対に一族の娘を皇帝に娶せていたのは、①安史の乱の功臣である郭子儀一族、及び⑤北周以来の外戚竇氏であった。また、③裴氏と④柳氏は、共通の姻族楊氏が后妃を輩出していた。一方、②魏博節度使、⑥成徳節度使、⑦義武節度使は、いずれも河北に立地した藩鎮だが〔地図〕、自身の一族からもその姻族からも、皇帝の后妃が出た形跡は見出せない。[5] この点において、これら三鎮

に対する公主降嫁は、外戚等の国内諸勢力よりもむしろ、外国勢力である⑧ウイグルに近い特徴を備えていたことになる。

実は、河北藩鎮への公主降嫁にはさらなるウイグルとの共通点がある。それが、本来外国勢力に降嫁されるべき仮公主（皇帝の実の娘ではないが公主として降嫁された、皇族や臣下の娘）の存在である。例えばウイグル牟羽可汗（在位：七五九～七七九）には、朔方節度使僕固懐恩の娘が降嫁された。[6] ところが、文宗の開成二年（八三七）、成徳節度使王元逵に降嫁された寿安公主（後掲〔表2〕No.37）は、『新唐書』巻二一一、王元逵伝（五九六一頁）に「絳王悟の女壽安公主」と明記される通り、文宗ではなく絳王悟（文宗の兄）の娘であった。国内勢力に向けた明白な仮公主降嫁は唐代を通じて本事例のみだが、この点からも成徳節度使を始めとする河北藩鎮への公主降嫁の、ウイグルとの類似は明らかである。[7]

この理由としては当然、朝廷が河北藩鎮とウイグルをいずれも軍事的脅威と感じながら、反面自身に繋ぎとめたいと図った事情が関係していよう。ウイグルについては、西方から進出する吐蕃との対抗上、軍事的な提携が欠かせなかった。[8] 他方河北藩鎮も、押蕃使を兼任して対外防衛を担い、[9] また辟召を通じて科挙合格の未任官者を採用して人事的な矛盾を解消するなど、[10] 唐朝の存続に寄与する側面も持った。だがしかし、一層特筆されるべきは、構成勢力よりみた河北藩鎮の実態である。ウイグルがトルコ系遊牧民だったのは言を俟たないが、今回挙げられた三鎮も、中核を担ったのはいずれも遊牧勢力であった。即ち、成徳節度使の王氏は契丹人、義武節度使の張氏は奚人であり、また漢人である魏博節度使田氏の軍団にも、多数のソグド系武人の流入がみられた［森部二〇〇二A、七八―八〇頁／森部二〇〇八］。この点に注目するなら、公主降嫁における河北藩鎮とウイグルとの類似性は、唐朝の臣下として節度使の名を冠す河北藩鎮が、実質的にはウイグルに準ずる遊牧的な政権と朝廷に認識されていたことを物語る。よって、

〔表2〕河北諸藩鎮への公主降嫁

№.	降嫁年（年号）	降嫁年の皇帝	公主	公主の父	駙馬	駙馬の地位	備考	典拠
0	七七四（大暦九）	代宗	永楽公主	不明	田華	魏博節度使の子	—	旧一四一、新八三、会要六、通鑑二二五
5	七八五（貞元元）	徳宗	嘉誠公主	代宗	田緒	魏博節度使	—	旧一四一、新八三、会要六
12	七八六（貞元二）	徳宗	義陽公主	徳宗	王士平	成徳節度使の子	—	旧一四二、新八三、会要六
13	七八七（貞元三）	徳宗	義章公主	徳宗	張茂宗	義武節度使の子	—	旧一四一、新八三、会要六
10	七九六（貞元一四）	徳宗	新都公主	代宗	田華	魏博節度使の兄	№.0永楽公主の死に伴い再度降嫁	旧一四一、新八三、会要六
23	八〇四（貞元二〇）	徳宗	襄陽公主	順宗	張克礼	義武節度使の子	—	旧一四一、新八三、会要六
24	八〇九（元和四）以前	徳宗～憲宗	虢国公主	順宗	王承系	成徳節度使の子	—	旧一六〇、新八三、会要六
37	八三七（開成二）	文宗	寿安公主	絳王悟	王元逵	成徳節度使	仮公主。絳王悟の父は憲宗	旧一四二、新八三、会要六

※№.は〔表1〕と対応。略号その他は〔表1〕に同じ。

河北藩鎮に公主降嫁が行われた背景を解明するには、ウイグルの動向に目を配ることが不可欠となる。

（2）公主降嫁の時期的偏差と「建中の反乱」

次に、降嫁の時期をみてみたい。実はウイグルと河北藩鎮とは降嫁時期に明らかな相違がある。ウイグルへの真公主降嫁は、徳宗期（№.16）・憲宗期（№.35、№.36）と継続して実施された。ところが、魏博・成徳・義武節度使への真公主降嫁は、徳宗の貞元年間（七八五～八〇五）という極めて限定的な時期に集中している。

〔表2〕は、唐代全体を通して河北藩鎮に降嫁された公主（仮公主も含む）の全八例を、婚姻の年代順に並べたものである。このうち、父が不明な永楽公主（№.0）と、先述した寿安公主（№.37）を除く六例は確実に真公主である。興味深いことに、この六例の内、実に五例（№.5、12、13、10、23）が徳宗の貞元年間に降嫁されている。唯一、成徳節度使の息子王承系に降嫁された虢国公主（№.24）のみ降嫁年を確定できないが、徳宗が順宗の娘を河北藩鎮に降嫁した事例と

して襄陽公主（№23）があり、また憲宗期になると朝廷は積極的に成徳節度使の討伐を敢行するため、虢国公主の降嫁も徳宗の貞元中と考えて大過ない。

公主降嫁に限らず婚姻には、適当な男女の有無や同姓不婚など、様々な制約が存在する。しかし、例えば義章公主（№13）は、張茂宗への降嫁を約束された貞元三年（七八七）当時わずか三歳に過ぎず、実際の婚姻は十年後の貞元一三年（七九七）、張茂宗の母の喪中を押し切って強行された。[11] 河北藩鎮への公主降嫁が、年齢的・儀礼的制約を無視するほどの火急案件だったことが推し測れよう。

このような時期的偏差の理由として注目したいのが、貞元年間に先立つ建中（七八〇～七八三）・興元（七八四）年間に発生した、大規模藩鎮反乱である。後の行論とも関わるので、ここで本稿に関係する概要を述べておきたい。[12] 各藩鎮の位置関係は前掲〔地図〕参照。

建中二年（七八一）、成徳節度使李宝臣が没すると、息子李惟岳の世襲を求めて、隣接する魏博節度使、及び平盧節度使（会府：鄆州）らが一斉に挙兵した。ほどなく李惟岳は麾下の武将王武俊に殺害されたが、朝廷は王武俊を差し置いて同僚の張孝忠に成徳節度使を授けた。これを不満とした王武俊は魏博・平盧節度使に加え、盧龍節度使（会府：幽州）を誘って各々王を自称し、淮西節度使（会府：蔡州）を皇帝に祭り上げて乱を拡大させた。だが興元元年（七八四）、朝廷が王武俊に成徳節度使を授けると彼は朝廷側に寝返り、同年五月には反乱軍の首魁となった盧龍節度使を撃破して反乱鎮圧に貢献した。同じ頃魏博節度使でも、藩帥田悦を殺害した従兄弟田緒が新藩帥に任じられた。また張孝忠は、結局旧成徳節度使領の一部を分けて新設された義武節度使に落ち着いた。この一連の反乱を、本稿では仮に「建中の反乱」（七八一～七八六）と呼ぶ。

魏博・成徳・義武節度使への公主降嫁は、この「建中の反乱」終息直前から直後に集中している。徳宗は、まず貞

元元年（七八五）、魏博節度使田緒に対し嘉誠公主（No.5）を、次いで翌貞元二年（七八六）、成徳節度使王武俊の息子王士平に義陽公主（No.12）を、さらに貞元三年（七八七）には義武節度使張孝忠の息子張茂宗に義章公主（No.13）を降嫁した。一連の降嫁は、対象者が「建中の反乱」に関与している点、「建中の反乱」末期の貞元元年（七八五）以降三年連続して行われた点から、この反乱を踏まえた政治的・軍事的背景のもとに実施されたと考えるのが自然である。続く新都公主（No.10）・襄陽公主（No.23）・虢国公主（No.24）の降嫁は、先の三例で結ばれた血縁を一層補強するためであろう。

そのため、公主降嫁の要因としては、「建中の反乱」平定に対する恩賞及び反乱勢力の懐柔を想定することができる。[13] 特に恩賞という観点からみれば、最大の功労者は盧龍節度使を破った成徳節度使王武俊である。さらに、魏博節度使田緒は反乱軍側に加担した前藩帥の田悦を殺害して朝廷に帰順した功があり、[14] また義武節度使張孝忠は反乱軍による再三の誘いを拒否し続けた。[15] こうした功績を労うべく、彼ら自身或いはその子弟に降嫁が行われた可能性は、十分想定し得る。一方、王武俊・田緒・張孝忠はいずれも乱中の混乱期に藩帥位に就いたため、自身の支配基盤の確立が緊急に求められた。そこで彼らは、自身或いは息子への公主降嫁によって朝廷の権威を求め、軍情の安定に務めたのである［cf. 堀一九五一、二八九頁］。

本章の考察から、河北藩鎮への公主降嫁には、ウイグルとの共通点があったこと、及び「建中の反乱」が関係したことが明らかになった。ただし、公主降嫁は河北の藩鎮中、魏博・成徳・義武節度使に限定され、盧龍節度使及び彼らと共に「建中の反乱」に加わった河南の諸藩鎮は降嫁を受けることがなかった。そこで最後にこの理由を、「建中の反乱」期のウイグルと河北藩鎮との関連に焦点を当てて明らかにしたい。

第三章　河北藩鎮とウイグル

（1）「建中の反乱」におけるウイグルの動向と河北諸藩鎮

河北藩鎮への公主降嫁の背景について、史料は殆ど言及していない。そこで本章では、「建中の反乱」期のウイグルの動向を踏まえ、魏博・成徳・義武節度使が降嫁先に選定された理由、及び盧龍節度使に降嫁が無い理由を明らかにする。実は「建中の反乱」中、ウイグルは河北藩鎮の誘いを受けて河北に侵入し、最終段階まで反乱軍を援助している。しかもウイグルを誘導した藩鎮には、後に公主降嫁を受ける成徳節度使・魏博節度使が含まれていた。『新唐書』巻二一二、朱滔伝（五九七二頁）は、建中三年（七八二）、盧龍節度使朱滔（在任：七七四～七八五）が冀王を自称した記事に続き、次のように記す。

（朱滔は）僭（おか）して相王するに及び、武俊（王武俊。成徳節度使。趙王を自称）・悅（田悅。魏博節度使。魏王を自称）・納（李納。平盧節度使。斉王を自称）と與に、四の金鑰を回紇に納めて曰わく、四國（冀・趙・魏・斉）、願わくは可汗に聽命せんことを。謹みて金鑰を上せば、啓閉・出納は、唯だ命ずる所ならんと。是に至りて、焉（これ）に師を乞う。回紇は二千騎を以て從い、而して武俊も亦た先に師を乞えば、以て懷光（李懷光。河中節度使。討伐軍の武将）の餉路を斷たんとするも、未だ至らずして、王師還る。回紇、幽州を過ぐるに、滔（朱滔）の使、其の酋・達干に説きて曰わく、若し能く同に河を度りて南すれば、玉帛・子女は不貲にして、計（おそら）く得るべし、と。達干、許諾す。

王を自称した盧龍・成徳・魏博・平盧節度使は、共にウイグルに遣使して命に従う意を示し、軍事援助を請うた。これに応じたウイグルは、二千の軍団を「達干」に率いさせ、河北に侵攻した。達干（タルカン、tarqan）は、可汗に近侍した幹部クラスの行政官僚なので、[16] この入寇は単なる一部勢力の流入ではなく、本国の意志を受けた組織的な軍事行動と考えて良い。[17] この後、ウイグルは河南収奪の利を説く盧龍節度使朱滔に呼応して河北に残留し、興元元年（七八四）五月、朝廷側に寝返った成徳節度使に敗れるまで、河北一帯を席巻し続けた。[18]

「建中の反乱」後、朝廷は河北における藩鎮反乱とウイグル入寇との融合を警戒するようになる。例えば翰林学士の白居易は憲宗が推進した成徳節度使討伐に反対し、その理由の一つにウイグル・吐蕃の侵入を挙げた（白居易『白居易集』巻五九「請罷兵第二状　請罷恒州兵事宜」中華書局標点本、一二五二頁）。

> 臣、伏して聞すらく、回鶻・吐蕃は、皆な細作有りて、中國の事は、小大盡く知る、と。今、天下の兵を聚むるは、唯だ承宗（王承宗。成徳節度使）一賊を討つのみなるも、冬自り夏に及ぶまで、都な未だ功を立てず。則ち兵力の強弱、資費の多少は、豈に宜しく西戎・北虜をして一一之を知らしむべけんや。忽ち利を見て生心し、虚に乗じて入寇せん。今日の勢力を以て、能く其の首尾を救うべけんや。兵連なりて禍生ずれば、何事も有らず。萬一此に及べば、實に安危に關わる。臣毎に之を思い、憂い骨髄に入る。

白居易の主張によれば、ウイグルや吐蕃は、細作（間諜）を用いて成徳節度使討伐難航の窮状を知悉しており、唐の虚を突いて入寇する危険性があった。特にウイグルについてこのような指摘が可能になったのは、先の「建中の反乱」期の経験を踏まえたからに他なるまい。[19] 同様の認識は白居易に限らず、宰相の李絳も「北狄・西戎は、素より姦

狡多ければ、忽ち間隙に乗じて邊疆を侵犯す。又た須らく兵を興し、以て防遏に事むべくも、首尾應敵すれば、則ち内外憂危せん」（李絳『李相国論事集』巻三「又上鎮州事」叢書集成初編、二〇頁）と述べ、成徳節度使討伐の隙に「北狄」即ち北方のウイグルが辺境を侵略する可能性を指摘した。朝廷にとって、河北における藩鎮反乱の泥沼化と、それに乗じたウイグル侵攻の再現など、到底許されなかったのである。

前掲『新唐書』朱滔伝にあるように、「建中の反乱」後に公主降嫁を受けた成徳・魏博節度使は、まさにウイグルを河北に引き入れた張本人だった。とりわけ成徳節度使は、他に先駆けて支援を要請するなど積極的である。最終的にその撃破に貢献したとはいえ、彼らがウイグルと連絡可能な手段・人脈を有していた点は看過できない。[20]

そのウイグルの侵入路として、絶好の立地を備えていたのが義武節度使である。義武節度使自身が「建中の反乱」中、ウイグルと手を組んだ形跡は無い。しかし義武節度使の西北方には、太行山脈越え最大の要衝、飛狐口が控えていた。飛狐口は爾来、モンゴル高原の遊牧民による河北平原への流入経路となっており［李孝聡一九九二、五六―五八頁／王文楚一九九六、二五五頁、二六〇頁］、例えば聖暦元年（六九八）、突厥の黙啜可汗がここから河北に侵入し大規模な掠奪を展開した事例は名高い。[21] そのため義武節度使は常にモンゴル高原方面を監視していたらしい。『旧唐書』巻一四一、張茂昭伝（三八五八頁）には次のようにある。

（貞元）二十年（八〇四）十月、（義武節度使張茂昭が）入朝し、累ねて河北及び西北邊の事を陳奏するに、詞情は忠切たれば、德宗聳聽し、嘆じて曰わく、卿に見ゆるの晩きを恨む、と。宴を麟德殿に錫い、良馬・甲第・器用・珍幣を賜ること甚だ厚く、仍お其の第三男克禮を以て晉康郡主（＝襄陽公主）を尚す。

義武節度使は河北の情勢に加え「西北邊の事」をも朝廷に報告した。この「西北邊」の情報が、飛狐口の向こう、モンゴル高原にいたウイグルの動静を含む重要な内容だったことは想像に難くない。だからこそ徳宗は、返礼・恩典の意味を込めて、即座に義武節度使への公主降嫁を決断したのである。

以上のように、魏博・成徳・義武節度使はそれぞれ軍事的・地理的に、ウイグルの河北侵入と深く関与していた。他方、河南の藩鎮は立地上、北方草原世界と直接交流する可能性は極めて低く、その形跡も乏しい。[22] こうした状況を踏まえると、集中的な魏博・成徳・義武節度使への公主降嫁の背景に、ウイグルとの連携を警戒し、自身の娘や彼女の侍臣といった朝廷側の人物をその軍内に送り込もうとした徳宗の意図を読み取ることができる。実際に嘉誠公主（No.5）は、駙馬田緒の没後、藩帥を世襲した息子田季安の執政を補佐し、魏博節度使の軍政を監督していた。[23] 河北藩鎮への公主降嫁は、単なる恩賞・懐柔ではなく、ウイグル防衛戦略の一環でもあったといえる。

だがそれならば、盧龍節度使に唐代を通じて仮公主の降嫁さえ一度も確認できない点は如何に説明すべきであろうか。そこで最後にこの理由を、盧龍節度使とウイグルとの特殊な関係に焦点を当てて考察したい。

（2）盧龍節度使とウイグル

盧龍節度使は、そもそも安史の乱淵源の地であり、また北辺防衛の最前線として常に遊牧勢力の圧力に晒されていた［松井一九五九、二九―三〇頁／呉光華一九九〇、二三四頁］。そのため公主降嫁が無いのは、朝廷が特に強烈な反唐朝的傾向を持つ盧龍節度使を警戒・排斥したためと見做す見解がある［馮金忠二〇〇六、二一八頁］。しかし盧龍節度使は、河北の中で最もウイグルに近い立地を備え、かつ「建中の反乱」時、一貫してウイグルと行動を共にしたのである。よって本稿の考察を踏まえるなら、朝廷は盧龍節度使にこそ、その動向を警戒して公主を降嫁させたかった

はずであり、懐柔こそすれ敢えて排斥するなど考えにくい。つまり公主降嫁が実現しなかったのは、朝廷ではなく盧龍節度使側に、降嫁を受け入れ難い何らかの特殊事情があったためと判断される。

そこで想起されるのが、これまで検討してきたウイグルの存在である。盧龍節度使は、北方遊牧世界と直接接壌する特徴的な地理環境を背景に、奚・契丹、さらにはソグド人など、多様な集団を軍団に内包していた。[24] 特に奚・契丹に対しては、押蕃使として彼らの慰撫と防衛に努めたことが知られる。[25] だがしかしウイグルは、奚・契丹と並んで、或いはそれ以上に盧龍節度使と深い繋がりを築いていた。実は代宗の大暦年間（七六六～七七九）、盧龍節度使朱滔が、ウイグル王女を娶ったのである。『新唐書』巻二一二、朱滔伝（五九七二頁）は次のように記す。

> 初め、回紇は女を以て奚王に妻す。大暦の末、奚亂れ、王殺さるれば、女は逃歸して平盧（安史の乱前の平盧軍所在地、営州か）に道くに、滔（朱滔）は錦繡を以て道に張り、其の至るを待ちて婚を爲さんことを請う。女悅び、焉を許す。既にして遣使して回紇に壻禮を修むれば、回紇喜び、報いるに名馬・重寶を以てす。

元々奚に婚嫁していたウイグル王女は、奚王殺害という混乱を受け逃げ出し、道中で盧龍節度使朱滔から求婚された。王女の快諾を得た朱滔は義父たるウイグルに「壻禮」を修め、婚姻は円満に成立した。おそらく両者には元より恒常的な連絡があったのだろう［林一九九二、一一七頁］。

この婚姻は従来さほど注目されてこなかったが、河北藩鎮が外国勢力の王女を娶った唯一無二の事例として、非常に貴重な情報を提示する。婚姻の報告を受けたウイグルは、持参金として盧龍節度使に名馬を贈った。一方盧龍節度使は、ウイグルへ「錦繡」に代表される高級絹織物を進呈したはずである。一連の遣り取りは、これがウイグル本

国、突き詰めれば当時の牟羽可汗の了承を得ていたことを物語る。つまり盧龍節度使は奚の混乱という偶然に乗じて、ウイグルからの「公主降嫁」を実現させたのである。

ウイグルは安史の乱終息直後の広徳元年（七六三）八月、唐から降嫁された仮公主の実父、朔方節度使僕固懐恩の反乱を援助していた。[26] この先例に鑑みれば、「建中の反乱」に際してウイグルが盧龍節度使を支持した一因にも、両者の婚姻を容易に想定できる。実際に『資治通鑑』巻二二八、建中四年（七八三）十月条（中華書局標点本、七三六五―七三六六頁）は、ウイグルが反乱に加担した理由として、朱滔との通婚を挙げている。

> 是より先、武俊（王武俊）、回紇の兵を召し、李懐光等の糧道を絶たしめんとするも、懐光等已に西して去れば、回紇の達干、回紇千人・雑虜二千人を將いて適きて幽州の北境に至る。朱滔因りて之に説き、與に俱して河南に詣りて東都を取り、朱泚（朱滔の兄。長安にて皇帝を自称）を應接せんと欲すれば、河南の子女を以て之に賂（まいな）うを許す。滔は回紇の女を娶りて側室と爲し、回紇、之を朱郎と謂い、且つ其の俘掠に利あれば、之を許す。

当時のウイグルの統治者は、牟羽可汗を殺害した頓莫賀達干である。[27] だが可汗交替後も、両者の紐帯は断絶していなかった。それどころか朱滔は、「朱郎」と呼び名されるほどウイグルと懇意になっている。さらに双方の交流は徳宗・憲宗期以後も継続したらしく、武宗（在位：八四〇～八四六）期にウイグル帝国が瓦解すると、盧龍節度使は東面招撫迴鶻使を帯び、[28] 残存勢力の掃討・按撫に務めている［山田一九八六、一七二―一七四頁／村井二〇〇八、四八―四九頁］。この時南走して盧龍節度使内に流入したウイグル人集団からは、乾符二年（八七五）から光啓元年（八八五）まで盧龍節度使を務める李茂勲・李可挙親子が台頭した。[29]

言うまでもなく節度使は唐朝の使臣である。だが盧龍節度使は、その立地上、唐朝廷だけでなくウイグルにも配慮した、多面的な「外交」を展開せざるを得なかったといえる。盧龍節度使に唐朝廷からの公主降嫁が実現しなかった理由としては、このような盧龍節度使の主体性を考慮せねばなるまい。既述のように河北藩鎮への公主降嫁は、ウイグル対策を念頭に展開された。しかし盧龍節度使は、ウイグル公主との婚姻を結んで以降、可汗を義父と仰ぎ、名馬提供や軍事援助も享受してきた。つまり盧龍節度使の軍事力の維持、ひいては軍団の存続は、一面ではウイグルからの恩恵に依っていたのである。この軍情が、両者の交流を監視・制限し得る政策、朝廷からの公主降嫁を受け容れなかったのであろう。さらに言えばそのウイグルの影響が、時として強い反唐朝的傾向、或いは隣接諸藩鎮に対する独立性[30]として顕在化したのではないだろうか。

なお、徳宗の後、憲宗は藩鎮に対し積極的な軍事討伐という強硬策を取った。さらに続く穆宗の長慶元年（八二一）～二年（八二二）には、懸案であった北方のウイグル、そして西方の吐蕃との間で、国境を確定する三国会盟が締結され、唐朝を巡る国際関係は安定期を迎えた［森安二〇〇七、三五〇―三五二頁］。こうした情勢変化の中で、河北藩鎮に対する公主降嫁はその意味を失い、実施されなくなってゆくのである。

おわりに

本稿では、河北藩鎮への公主降嫁を、単なる国内問題としてではなく、遊牧勢力であるウイグルの動向と関連付けて考察した。「建中の反乱」直後、徳宗は魏博・成徳・義武節度使に対し、複数回に亘って公主を降嫁させたが、反対にその藩帥一族から娘を娶ることはしないという、ウイグルと同じ特徴の婚姻を行った。これは、唐朝の臣下を称

しながら朝廷の統制を受けない、遊牧的政権としての河北藩鎮の性格を明示する事例といえよう。ただし、盧龍節度使へは公主降嫁が実現していない。この理由については朝廷側だけでなく、盧龍節度使側の事情を考慮する必要がある。即ち盧龍節度使は、代宗期、牟羽可汗から「公主降嫁」を受けたことによる血縁、及び「建中の反乱」時の軍事援助など、諸方面でウイグルと密接な紐帯を築いていた。その頻繁な交流の軌跡が、ウイグル防衛を推し進める唐朝廷からの公主降嫁を盧龍節度使に許さなかったのであろう。河北藩鎮は、唐・ウイグルといった諸勢力との角逐の中で、自らの自立性を維持していたのである。

当時、河北は遊牧勢力と農耕勢力が拮抗・共存した半農半牧地帯であり、北方草原世界の動向と大きく連動していた。[31] 今回検討した河北藩鎮とウイグルとの連動は、こうした地理的特徴の故に実現したものであろう。筆者は先に新見二〇一三で、同時期の河南の藩鎮における、東方の海上世界を往来した海商との結びつきを指摘した。河北・河南の藩鎮の活動は、朝廷だけでなくそれぞれ隣接する草原世界・海上世界からも影響を受けていたのである。そのため、今後はその双方の世界と中国内地との関わりを視野に入れ、河北・河南の動向を東部ユーラシアの共時的な歴史展開の中に位置づける必要があるのではないだろうか。

［注］

（1）公主降嫁の中でも、特に外国に降嫁された公主（和蕃公主）の政治性はしばしば指摘される。

（2）穆宗期以降は不明な事例が圧倒的に増え、また第二章第二節で後述するように河北藩鎮への公主降嫁は徳宗期に集中するという特徴を持つため、今回は掲げる事例の下限を憲宗期までとした。

（3）『旧唐書』巻一四一、田承嗣伝、三八三八頁／『新唐書』巻二一〇、田承嗣伝、五九二四頁。

（4）ウイグルは至徳元載（七五六）、帝室に連なる男子敦煌郡王に可汗の養女を娶せている［藤野二〇一二、一二頁、表二］が、皇帝の婚姻と皇族男子の婚姻とは厳密に区別されるべきであろう。

（5）勿論史料的な制約はあるが、藩鎮が帝室に入侍させたのは男子であった。例えば、平盧節度使の李師道が長子を、成徳節度使王承宗が二子を入侍させた例がある（『旧唐書』巻一二四、李師道伝、三五三九頁／『旧唐書』巻一四二、王承宗伝、三八八一頁）。一方、朝廷に差し出した女子は女口や歌妓であった［高世瑜一九九九、二九―三〇頁］。

（6）『旧唐書』巻一二一、僕固懐恩伝、三四七九―三四八〇頁／『新唐書』巻二二四上、僕固懐恩伝、六三六七頁。

（7）ちなみに、仮公主の駙馬王元逵の先祖五哥子はウイグル人だという（『旧唐書』巻一四二、王廷湊伝、三八八四頁／『新唐書』巻二一一、王廷湊伝、五九五九頁）。

（8）例えば貞元四年（七八八）の咸安公主の降嫁は、吐蕃に対抗するための戦略である［羽田一九五七、二一一頁］。

（9）押蕃使の設置と職掌は黎虎二〇〇二／村井二〇〇三参照。

（10）河北藩鎮と辟召については、渡辺一九九八に代表される渡辺孝氏の一連の論考がある。

（11）『旧唐書』巻一四一、張茂宗伝、三八六〇―三八六一頁／『新唐書』巻八三、鄭国荘穆公主伝、三六六四頁。

（12）反乱の経過は、大澤一九七三、三―六頁が詳しい。

（13）河北藩鎮への公主降嫁を懐柔策の一環とみる指摘は、築山一九八三、七頁／李志生一九九七、八一頁／高世瑜一九九九、七二頁／金瀅坤二〇〇六、一三四頁にも見られる。

（14）『旧唐書』巻一四一、田緒伝、三八六三―三八六四頁／『新唐書』巻二一〇、田悦伝、五九三二頁。

（15）『旧唐書』巻一四一、張孝忠伝、三八五六―三八五七頁／『新唐書』巻一四八、張孝忠伝、四七六九頁。

（16）タルカンについては護一九六七、一一二頁及び一四九頁、注七六／内田一九七五、四八四頁、注二八参照。

（17）Mackerras, 1972, p. 41は、当時ウイグルが唐朝と友好的だったため、この入寇に可汗の意志が働いた点には疑問を呈する。だが、ウイグルは盧龍節度使とも親密だったので（本稿第三章第二節）、この入寇も可汗の指示を受けた可能性が高い［林一九九二、一一七頁］。

（18）『資治通鑑』巻二三一、興元元年（七八四）五月丙子条、七四三二頁。

(19) なお本稿では殆ど検討し得なかったが、「建中の反乱」時、吐蕃も唐朝の西辺を侵略し、長安の朱泚と連絡を通じていた［佐藤一九五九、六三八―六四一頁］。ただし、吐蕃は領域が河北藩鎮と直接接壌しない点がウイグルと異なる。

(20) 河北藩鎮とウイグルとの仲介者は、双方に存在を確認できるソグド人が有力であろう。河北藩鎮軍内のソグド人は注24の森部諸論文を、ウイグルとソグド人は森安二〇〇七、二七八―二八〇頁を参照。

(21) 『旧唐書』巻一九四上、突厥伝上、五一六九頁。

(22) なお、河南の藩鎮でも忠武節度使（会府：許州）等では、軍団とウイグルとの関連が指摘されている［宮崎一九四〇、一一八―一二六頁］。また、平盧節度使は帝室と同姓の李氏なので、原則的に降嫁の対象となり得ない。

(23) 『旧唐書』巻一四一、田季安伝、三八四七頁。

(24) 范陽節度使安禄山の軍団には奚・契丹・ソグド系突厥等が内包されていた［森部二〇〇二A、八六―八七頁］。よって、その後身である盧龍節度使内にも、これら諸民族が多く含まれていた可能性は高い。盧龍節度使内のソグド人については森部二〇〇二B、五七頁／森部二〇〇八、一二四―一二八頁／馮金忠二〇一二A、一七五―一七六頁参照。

(25) 押奚・契丹両蕃使としての活動は、松井一九五九、一一頁／黎虎二〇〇二、一一六―一一七頁参照。

(26) 僕固懐恩は、安史の乱平定に功を挙げたトルコ系武将。娘は仮公主として牟羽可汗に嫁いでいた。彼は安史の乱後、ウイグルや河北藩鎮と密通した嫌疑をかけられ反乱に及んだが、この時牟羽可汗は僕固懐恩を支援した［Mackerras, 1972, pp. 26-27／章羣一九八六、二八五―二八八頁］。

(27) 大暦一四年（七七九）、代宗が逝去すると、牟羽可汗は中国征服を企図し、大規模な南下を企てた。ところが、これに反対する頓莫賀達干のクーデターで殺害されている［森安二〇〇七、三一五頁］。

(28) 李徳裕『会昌一品集』巻三「授張仲武東面招撫迴鶻使制」（傅璇琮・周建国校箋『李徳裕文集校箋』河北教育出版社、三八―三九頁）

(29) 『旧唐書』巻一八〇、李可挙伝、四六八〇―四六八一頁／『新唐書』巻二一二、李茂勲伝、五九八三頁。

(30) 例えば代宗期の婚姻による河北・河南諸藩鎮のまとまりに、盧龍節度使は参加していない［新見二〇一二、六頁、図A］。

(31) 草原世界との連動からみたこの地域の重要性に関する諸見解は、森安二〇〇七、六〇―六一頁にまとめられている。

［参考文献］（日・中文は著者名五十音順、英文はＡＢＣ順。再録の場合は再録の頁数を記載）

石見清裕　一九八二「唐の建国と匈奴の費也頭」『史学雑誌』九一―一〇（再録：『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一九九八、一七―六三頁）。
内田吟風　一九七五『北アジア史研究（鮮卑柔然突厥篇）』同朋舎。
王　寿南　一九八八「唐代公主之婚姻」鮑家麟（編）『中国婦女子論集　二巻』稲郷出版社、九〇―一四四頁。
王　文楚　一九九六「飛狐道的歴史変遷」『古代交通地理叢考』中華書局、二五五―二六一頁。
大澤正昭　一九七三「唐末の藩鎮と中央権力」『東洋史研究』三三―二、一―二二頁。
金　瀅坤　二〇〇六「論中晩唐期河朔藩鎮割拠与聯姻関係」『学術月刊』四五―三八、一二六―一三五頁。
高　世瑜（小林一美・仁明訳）　一九九九『大唐帝国の女性たち』岩波書店。
呉　光華　一九九〇「唐代幽州地域主義的形成」淡江大学中文系（主編）『晩唐的社会与文化』学生書局、二〇一―二三八頁。
佐藤　長　一九五九『古代チベット史研究（下）』東洋史研究会。
章　羣　一九八六「僕固懐恩与李懐光之反叛」『唐代蕃将研究』聯経出版事業公司、二七三―三〇六頁。
陳　寒　一九九八「唐代公主的婚配特点及分析」『人文雑誌』一一三―三、九四―九七頁。
築山治三郎　一九八三「唐代公主（皇女）の降嫁について」『古代文化』三五―一〇、一―一七頁。
新見まどか　二〇一二「唐代後半期における「華北東部藩鎮連合体」」『東方学』一二三、二〇―三五頁。
――――　二〇一三「唐後半期における平盧節度使と海商・山地狩猟民の活動」『東洋学報』九五―一、五九―八八頁。
布目潮渢　一九六八「唐朝初期の唐室婚姻集団」『隋唐史研究』東洋史研究会、三一四―三六七頁。
羽田　亨　一九五七「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集（上）』東洋史研究会、一五七―三二四頁。
林　俊雄　一九九二「ウイグルの対唐政策」『創価大学人文論集』四、一一一―一四三頁。
日野開三郎　一九七八「唐代の和蕃公主」『久留米大学論集』二七―一（再録：『北東アジア国際交流史の研究（上）』三一書房、一九八四、二三三―二一一頁）。

馮　金忠　二〇〇六「幽州鎮与唐代后期政治」『中国辺境史地研究』二〇〇六―三（再録：馮金忠二〇一二B、二〇八―二一〇頁）。
――　二〇一二A「唐代河北藩鎮統治下的粟特人」馮金忠二〇一二B、一七三―一九三頁。
――　二〇一二B『唐代河北藩鎮研究』科学出版社。
藤野月子　二〇〇八「漢唐間における和蕃公主の降嫁について」『史学雑誌』一一七―七、三八―五七頁。
――　二〇一二『王昭君から文成公主へ』九州大学出版会。
堀　敏一　一九五一「唐末諸反乱の性格」『東洋文化』七（再録：『唐末五代変革期の政治と経済』汲古書院、二〇〇二、二六六―三一〇頁）。
松井秀一　一九五九「盧龍藩鎮攷」『史学雑誌』六八―一二、一―三六頁。
宮崎市定　一九四〇『東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社会』冨山房（再版：東洋文庫五〇八、平凡社、一九八九）
村井恭子　二〇〇三「押蕃使の設置について」『東洋学報』八四―四、二九―六〇頁。
――　二〇〇八「九世紀ウイグル可汗国崩壊時期における唐の北辺政策」『東洋学報』九〇―一、三三―六七頁。
護　雅夫　一九六七『古代トルコ民族史研究　I』山川出版社。
森部　豊　二〇〇二A「唐前半期河北地域における非漢族の分布と安史軍淵源の一形態」『唐代史研究』五（再録：「安史の乱前の河北における北アジア・東北アジア系諸族の分布と安史軍の淵源」森部二〇一〇、五九―八七頁）。
――　二〇〇二B「唐代河北地域におけるソグド系住民」『史境』四五（再録：「北中国東部におけるソグド人の活動と聚落の形成」森部二〇一〇、二七―五八頁）。
――　二〇〇八「ソグド系突厥の東遷と河朔三鎮の動静」『東西学術研究所紀要』四一（再録：森部二〇一〇、一二三―一八一頁）。
――　二〇一〇『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部。
森安孝夫　二〇〇七『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史五）講談社。
山田信夫　一九八六「九世紀ウイグル亡命移住者集団の崩壊」『史窓』四二（再録：『北アジア遊牧民族史研究』東京大学出版会、

一九八九、一五七―一八八頁）。
李　孝聡　一九九二「論唐代後期華北三個区域中心城市的形成」『北京大学学報』（哲学社会科学版）一九九二―二、五五―六五頁。
李　志生　一九九七「論唐代公主政策的階段性特点」『中国史研究』七六―四、七四―八三頁。
黎　　虎　二〇〇二「唐代的押蕃使」『文史』五九―二、一一五―一三〇頁。
渡辺　孝　一九九八「中晩唐期における官人の幕職官入仕とその背景」松本肇他（編）『中唐文学の視点』創文社、三五七―三九二頁。
Mackerras, C., 1972, *The Uighur Empire according to the T'ang dynastic histories : a study in Sino-Uighur relations 744-840*, Canberra : Australian National University Press.
Pan, Yihong, 1997, "Marriage Alliances and Chinese Princesses in International Politics from Han through T'ang," *Asia Major, 3rd Series*, 10/1-2, pp. 95-131.

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

The Relationship between the Marriage of T'ang唐 Princesses to *Fan-Zhen* 藩鎮 in Hebei河北 and the Movement of Uighur

Madoka Niimi

In this paper, we considered marriage of T'ang princess to *fan-zhen*, 藩鎮 in Hebei 河北, not as mere domestic issues, but as international issues associated with the trend of Uighur. Immediately after the "Rebellion of Jianzhong 建中" (781-786), T'ang imperial court several times married the princess to the Military Commander of Wei-Po魏博, Chen-te成德 and Yi-Wu義武. These marriages have two characteristic. First, the movement of the bride is limited from T'ang imperial court to the Military Commander. Second, provisional princess was included. These characteristics were consistent with Uighur.

While "Rebellion of Jianzhong", T'ang imperial court faced the Uighur invasion and *fan-zhen* in Hebei's rebellion. As a result of these rebellion, T'ang imperial court was to marry the princess of fan-chen in Hebei in order to prevent these rebellions from occurring at the same time. But the marriage of T'ang princess to *fan-zhen* has not been achieved in Le-rong盧龍. This is because Le-rong and Uighur had built a close relationship. For example, Le-rong had the marriage with Uighur princess, and received Uighur's military aid in "Rebellion of Jianzhong". This relationship didn't allow the marriage of T'ang princess to Le-rong. In other words, the marriage of T'ang princess to fan-chen in Hebei was deeply concerned with Uighur.